イチゴに光合成促進機　【園芸施設共済】

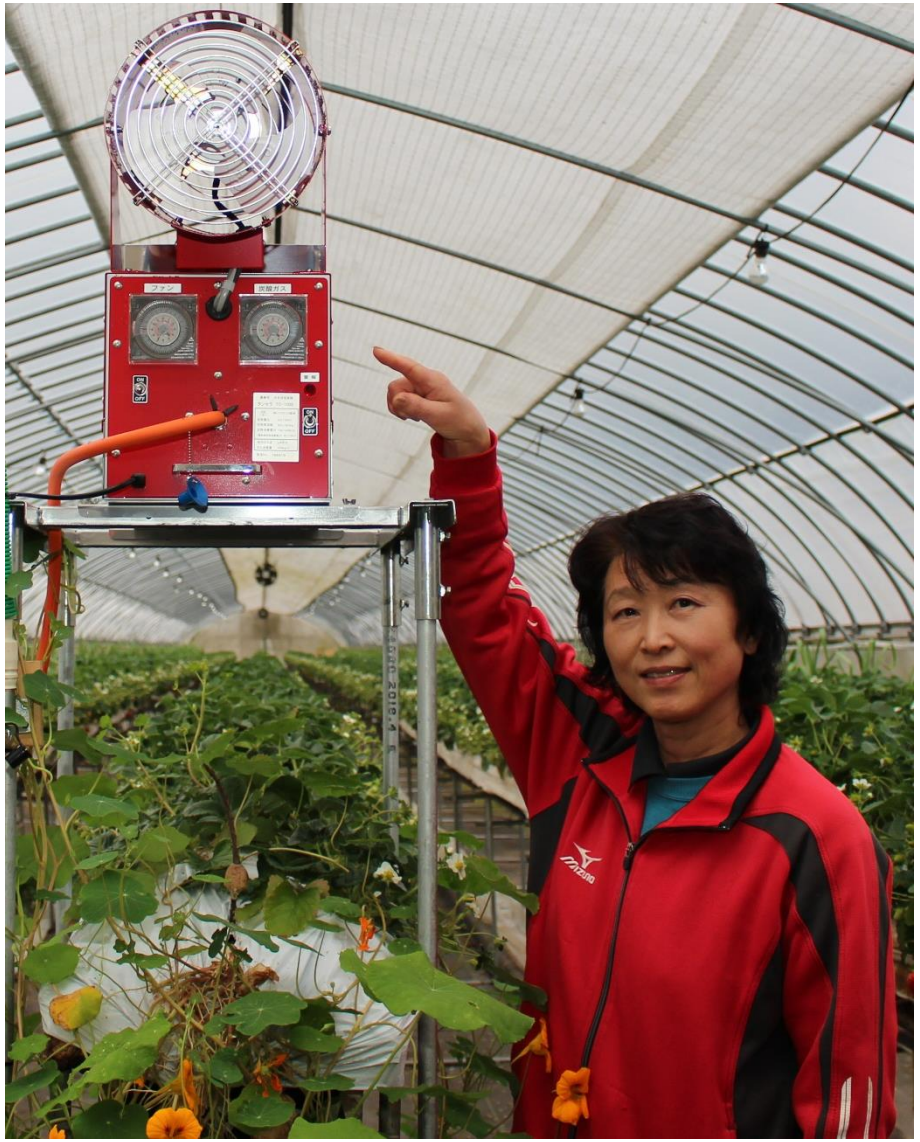
光合成促進機を取り入れ、イチゴ「さちのか」（11㌃）を栽培する三次市布野町の大前万寿美さん。５年前に促進機を導入したことで、果実個々の重量や品質の向上を実感し、収穫回数も増やすことができた。

ＬＰガスを燃焼して炭酸ガスを発生させ、ファンを回してハウス内の炭酸ガスの濃度を上げる。炭酸ガスにより活発に光合成することで、根が強くなるなどの生長を促す。収穫期間が長くなるほか、良品質で欠品が少なく、病気にもなりにくいという。

大前さんは促進機が午前６時から７時に稼働するよう設定し、光合成時の炭酸ガス濃度を調整。「温度や日照時間、湿度のデータを取り、３年目以降で樹勢が良くなり開花数が増えた。良いときで４回収穫していたのが、５回になった」

促進機の導入に携わったＪＡ全農ひろしまの生活部・燃料課の岡﨑雄児さんは「農家にとっては、収量が目に見えた成果になる。導入後も経験とノウハウが必要で、大前さん方ではその研究が成果につながった」と話している。

（農業共済新聞 中国版 2019年3月2週号より）



三次市布野町　大前 万寿美さん（57歳）